

ウェブサイト
『JPOP-VOICE』
における統合失調
症の当事者の
語りの特徴

孫波（和光大学大学院）

いとうたけひこ（和光大学教授）

take@wako.ac.jp

大高庸平（和光大学大学院）

小平朋江（聖隷クリストファー准教授）

心理教育・家族教室ネットワーク

第13回研究集会ポスター発表 NO.13

福岡県春日市クローバープラザ

センター棟東側5階507研修室

2010年3月20日14:30-15:30

【問題と目的】

- 近年、精神障害者の病いに対する闘病記や体験談が増えており、書籍・記事やウェブサイトとして公開されている(小平・伊藤, 2008)。
- 当事者の生の声から、病気の情報を得たり、様々な闘病体験があることを理解することは当事者やその家族にとって知識と気づきを得るうえで重要な意味を持っている。
- 本研究の目的は、そのようなウェブサイトの1つである『JPOP-VOICE』を対象として、病いの語りから統合失調症の当事者の語りの特徴を明らかにすることにある。

【結論】

- ウェブサイト『JPOP-VOICE』における統合失調症の当事者の語りには、服薬についての語り、障害者手帳を持つこと、地域で生きていくこと、他の人や仲間との関係、妄想・幻聴の症状、仕事の継続であった。地域で生きていくことの意義や人間関係の重要性という、「服薬」「病気」「経済」に関する特徴的なナラティブが見られた。
- ウェブサイトによって当事者の「生きにくさ」が表現された体験談は、当事者や家族をはじめとして社会的に情報が共有されることにより、病いへの理解の促進につながる。このような病いの当事者が語るウェブサイトはナラティブ教材(小平・いとう, 2010)としての活用も期待される。

JPOP-VOICE とは

「がんと向き合う」「統合失調症と向き合う」
の2つのテーマがある。

JPOP^(R)とは、財団法人パブリックヘルスリサーチセンター(PHRF)が「生活習慣病の予防と治療」および「疫学研究・臨床試験研究」に対する人々の意識向上をはかることを目的に、2004年に開始した広報モデル事業である。

JPOPでは、この目的のもとに参集したテレビ、ラジオ、インターネット、出版などのメディアが連携し、医療専門家グループの指導のもとに、社会に向けた正しい医療情報の提供を行っている。

その事業のひとつとして、病気の体験者やそのご家族、そして医療従事者の方の思いを動画で紹介するウェブサイトが『JPOP-VOICE』である。

【研究方法】

研究方法として、『JPOP-VOICE』ウェブサイトにおける当事者の語りをText Mining Studio Ver.3.1.1を使用して、テキストマイニングの手法により分析した。

The screenshot shows the homepage of the JPOP-VOICE website. At the top, there is a navigation bar with links for '体験者、医療者からのメッセージ' (Messages from Experiences and Medical Professionals), 'このサイトをご覧になる方へ' (For those who view this site), 'JPOPとは' (What is JPOP), and 'お問い合わせ' (Contact Us). The main heading is 'JPOP-VOICE'. Below it, a central message reads: '病気と向き合う体験者、医療者、支援者の声を動画でご紹介します。' (We will introduce the voices of people who experience illness, medical professionals, and supporters through videos). The page features two main content areas: 'がんと向き合う' (Facing Cancer) on an orange background and '統合失調症と向き合う' (Facing Schizophrenia) on a green background. At the bottom, there is a search bar with the text 'サイト内検索' (Site Search) and a '検索' (Search) button, along with a 'Powered by Google' logo.

JPOP-VOICE
(ジェイポップ-ヴォイス)
<http://jpop-voice.jp/>

分析対象は、『JPOP-VOICE』ウェブサイト収録されている統合失調症の当事者6人と、がん患者20人の語りである(2009年10月データ取得)。

	病い	男性(人)	女性(人)	計(人)
がん	大腸がん	6	2	20
	肺がん	1	2	
	膵臓がん	1		
	乳がん		6	
	子宮頸がん		1	
	卵巣がん		1	
統合失調症	統合失調症	5	1	6

表1 統合失調症の語りにおける特徴語(上位20単語)				
単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
薬	名詞	112	169	157.672448
病気	名詞	121	222	147.237311
今	名詞	99	275	65.743168
自分	名詞	162	539	55.413687
統合失調症	名詞	31	31	52.888812
子ども	名詞	34	46	50.973461
障害者	名詞	28	28	47.77054
一緒	名詞	39	77	44.264396
人	名詞	82	249	42.014843
親	名詞	24	30	37.429365
入院	名詞	48	126	36.173801
妄想	名詞	21	22	35.24177
一番	名詞	20	20	34.121814
家	名詞	28	52	33.703293
手帳	名詞	19	20	31.829588
仕事	名詞	52	153	29.517052
幻聴	名詞	17	17	29.003542
仲間	名詞	21	33	28.794281
生きがい	名詞	16	16	27.297451
地域	名詞	16	16	27.297451
調査	名詞	16	16	27.297451

表1から、統合失調症の当事者において見られる単語は薬、病気、今、自分、統合失調症、子ども、障害者、一緒、人、親、入院、妄想、一番、家、手帳、仕事、幻聴、仲間、生きがい、地域、調査であり、特徴的な使用単語であることが明らかになった。

表2 統合失調症の語りにおける係り受け関係(上位20件)				
係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
薬	名詞	飲む	動詞	14
人	名詞	いる	動詞	12
一緒	名詞	やる	動詞	6
障害者	名詞	手帳	名詞	6
飲む	動詞	薬	名詞	5
仕事	名詞	やる	動詞	5
調子	名詞	悪い	形容詞	5
薬	名詞	飲む+ない	動詞	5
こう	副詞	やる	動詞	4
どう	副詞	する+したい?	動詞	4
どう	副詞	やる	動詞	4
まあ	副詞	思う	動詞	4
もう	副詞	ちょっと	副詞	4
今	名詞	いう	動詞	4
自分	名詞	いる	動詞	4
病院	名詞	連れる	動詞	4
病気	名詞	知る	動詞	4
ACT	名詞	利用	名詞	3
いろいろ	副詞	やる	動詞	3
ご飯	名詞	食べる	動詞	3

表2から、統合失調症の当事者に特徴的な係り受けとして、「薬+飲む」、「一緒+やる」、「障害者+手帳」、「仕事+やる」、「どう+する+したい?」、「自分+いる」、「病気+知る」、「ACT+利用」、「いろいろ+やる」の表現が見られた。

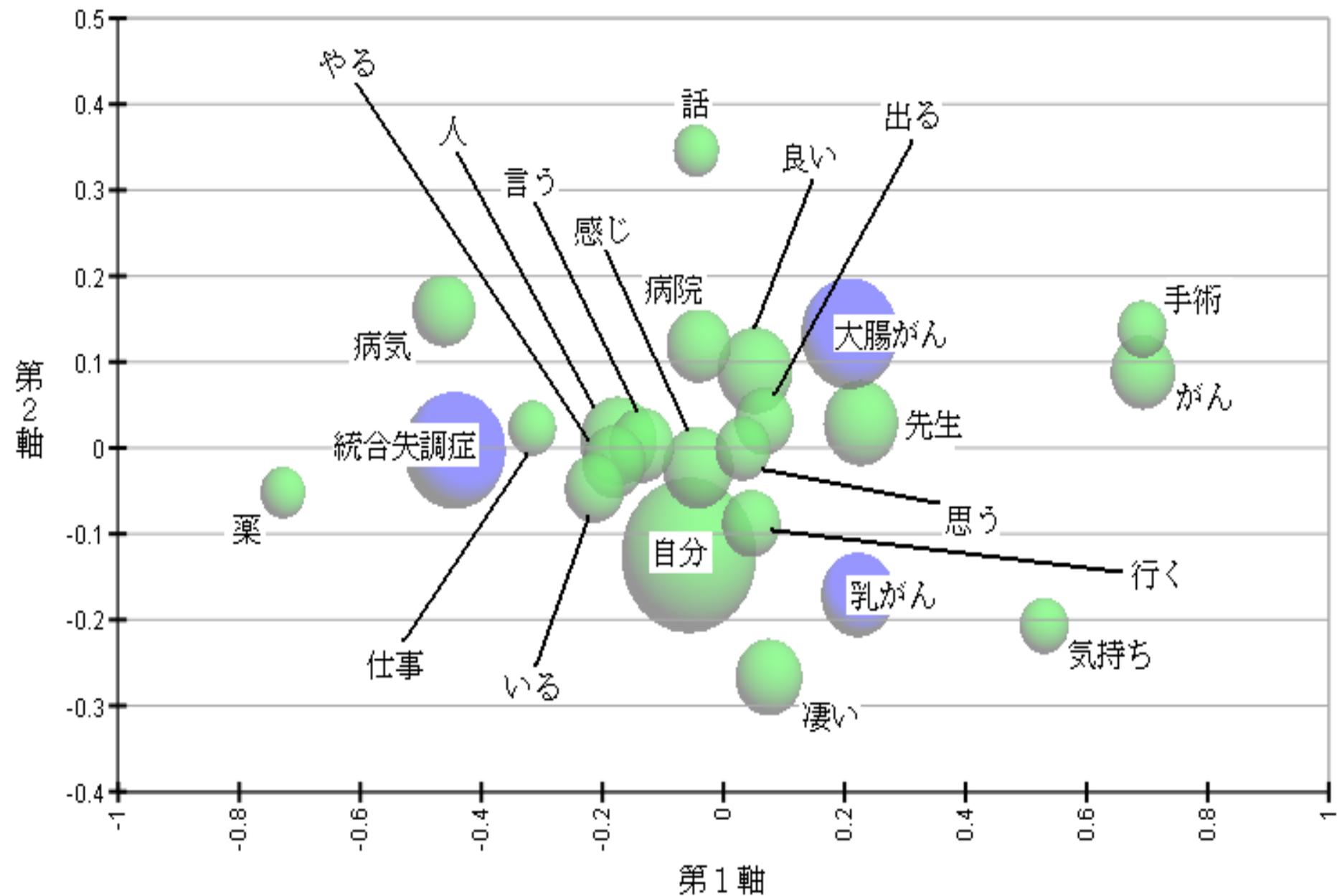


図1 対応バブル分析 病い(大腸がん・乳がん・統合失調症)と単語の関係

【結果】

図1から、「統合失調症」は“仕事”や“薬”や“病気”との関係が見られ、「大腸がん」では“先生”や“がん”や“手術”との関係が見られた。また、「乳がん」では“凄い”や“気持ち”との関係が見られることがわかった。

対応バブル分析では、“手術”や“先生”は大腸がんにおいて見られ、統合失調症には見られていない。また、統合失調症は“仕事”との関係が強く、“薬”との関係も見られることは、がんと比較し、特徴的であった。乳がんでは、“凄い”や“気持ち”との関係が見られることが特徴であった。

【考察】

がんと共通点

統合失調症は、人生のなかで病いとの共生を強いられる点で、がんという病いと共通である。図1から得られた“思う”、“感じ”、“言う”、“自分”といった単語は、どの病いにも共通しており、ウェブサイトには当事者の心理的・情動的な側面が語られていた。

がんと差異点

統合失調症の当事者の語りは、服薬、障害者手帳を持つ、地域で生きていく、人や仲間との関係、妄想・幻聴の症状、仕事の継続、など特徴的な語りが見られた。図1から、統合失調症には“病気”、“薬”、“仕事”の単語が見られており、病気や薬との付き合い方、社会とのつながりに関するサポートの重要性が示唆された。また、“先生”が見られなかったことは、自分自身が病いの先生として対処する関係があり、これは統合失調症に特有の関係であるのかもしれない。¹²

【文献】

- 小平朋江,伊藤武彦(2006)精神障害者の偏見と差別とスティグマの克服 マグロ・カウンセリング研究5,62-73
- 小平朋江,伊藤武彦(2008)精神障害の闘病記—多様な物語りの意義 マグロ・カウンセリング研究7,48-63
- 小平朋江・いとうたけひこ 2010 回復のための資源としての語り:精神障害者のナラティブの教材的活用 心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会(福岡大会)(ポスター会場 505研修室)
- 小平朋江,伊藤武彦 松上[他](2007)テキストマイニングによるビデオ教材の分析—精神障害者への偏見低減教育のアカウンタビリティ向上をめざして マグロ・カウンセリング研究6,16-31